

差別のない明るい町を

## 進路保障

支える・つなぐ 24

その2

大人の「世話焼き」が大事



市人権推進課（教育庁舎1階）  
TEL 32・2122  
FAX 33・3525

昨年の読売新聞9月11

日号の「支える・つなぐ」の欄に標題のことを提言されていたので、全文を紹介いたします。

「日々の生活で、親が何気なく行っている子どもへの『ごく普通の世話焼き』が、いかに大事なものであるのか。貧困家庭で育つ中高生に学習支援を行う活動を始めてきて、そう実感している。」

ある教え子は、うつ病の母親と生活保護を受けながら暮らし、高校を何とか卒業して働き始めた。「俺は同世代の友達とは別世界で生きているみたい。みんなにはあるのに、自分にはないものが多過ぎる」。そういつも言っ

いた。

朝飯も弁当も作ってもらった記憶がない。学校の連絡帳を見てくれない。宿題を助けてもらうことも、家族旅行に行くこともなかった。いじめられても泣き言も言えない。「褒められたことも、怒られたこともなく、会話もあまりない」

幼少期から大人の支えがない生活を毎日、年365日過ごす。それが日常となり、重いハンデを背負うようになる。温かい励みや支えがある家庭で育つ子とは、生活習慣、社会常識、学力、健康などあらゆる面で差がつくのは当然だ。

我々の学習教室で一つの対応を大事にしているのは、教育効果が高い

めだけではない。「自分だけ」に眼差しを向ける大人の存在を、彼らが絶対的に必要としているからだ。だから、家庭訪問して一緒に勉強したり、進路や家の悩みを聞いたりもしている。

志望校の説明会にも一緒に行くのは、「自分のため時間を割いてくれる大人がいる」と知ってほしいためだ。君も大切にされる価値のある子だと、行動で伝えたいからだ。それが、「支えない子ども期」を過ごした彼らの成長に、何より大事なのだと思っ

ている。  
（彩の国子ども・若者支援ネットワーク代表理事 白鳥勲）  
このような子どもたちに対して、私たちも、せめて優しい一言や励ましの手助け（世話焼き）をしてみたいものです。

### 参考・引用文献

「読売新聞」  
2013年9月11日(水)号

## 市民文芸 花みずき歌壇(294) 松並武夫・選

身の麻痺はもう九割が残る身が初日の温さ感じているなり

ひのみね総合療育センター 関 政明

《評》40年近く闘病生活を送っている関さんは、強靱な精神力と、持ち前のポジティブな性格が魅力的で、辛うじて動く左手でパソコンを駆使し電動車椅子で外出もして積極的に生きています。九割近く進んだ麻痺の身ながらも「初日の温み」を感じることが出来るのは生の証であり、神様のプレゼントかも知れない。まさに感動の作品である。

終日を雨のつぶやき聴いている

毛糸の網目は少し不揃い

横須町 山崎 泰子

手作りの赤唐辛子窓に吊り風に揺るるは冬の風鈴

横須町 福島 夢栄

秋などはすでに飛び越え冬型に初霜初雪北国の景

立江町 濱 耕一

静けさに淋しく響く鐘の音時雨るるままの宿坊に聴く

小松島町 多田 昭恵

紅葉は人の心も温めて木々も春まで冬眠に入る

中田町 倉橋 正則

清流に映える紅葉と白い雲木沢に向かい山深くなる

横須町 柿本美知子

箸蔵の里より千し柿送り来て

夫とおやつに食べ和みたり

小松島町 川人 豊子

寒空にふわふわ綿菓子浮かんでる

師走は老婆も忙しい日々

坂野町 橋本千代乃

始めてのしめ飾りなき正月を

引きこもりいて今日スーパーへ

中田町 松並 敦子